

近世後期における人間観の小考察

序 説

わが国における人間平等の思想は、本格的には、明治維新以降の近代社会において成立する。

しかし、近世後期⁽¹⁾、封建社会に生存していたが故のさまざまな制約・限界をもちながらも、封建的身分制を批判し、人間の平等を主張する人びとが出現した。

出羽国二井田村（現大館市）に生まれたと推定される陸奥国八戸の医師、安藤昌益（一七〇三～六二）は、一七五五（宝暦五）年、『自然真営道』一〇一卷九三冊（現存一五卷一五冊）を脱稿、万人が自然の理に従い、農業生産に従事する自給自足経済に基礎をおいた階級支配・身分差別や男女不平等のない「自然世」を理想社会とした。

曰く、「男女、万人、而只一人、明證、備、以三面部、自、知、在、矣。於三面部、八門、無二一別、是上貴聖王、面部、無三九門十門、備者、是下賤民、面部、無三七門六門、備者、是於人、無三上下貴賤、二別、自然備極、明證、矣、「男女、無三上下一人也。無三上、責三取下、無三奢欲、無三下、無三上諂巧」。故、無三恨、争二」。

このような人間観・社会観から、昌益は「立レ上、不耕、責三取、衆人、直耕、貧、食」う君主・武士の支配を否定した。⁽³⁾「法世」、すなわち封

成 澤 榮 壽

建社会、ひろく階級社会に鋭い批判を加えたのであった。

これは、支配・被支配の社会関係の根幹を問題にした革命思想であつたから、一部の人びとを除き、第二次世界大戦後まで同著の存在は知られなかった。⁽⁴⁾筆者らの世代が知ったのは、言うまでもなく、E・ハーバート・ノーマン（E. Herbert Norman）著、大窪愚二訳『忘れられた思想家——安藤昌益のこと——』（上・下二巻、一九五〇年、岩波新書。原題“Ango Shoenki and the Anatomy Japanese Feudalism”（未公刊））によつてである。

しかし、昌益の門人は、江戸・京・大坂・長崎など、各地に居住していたし、彼自身もそれらの地を訪れており、高弟神山仙確は師が常に万人の「直耕」を強調していたと述べているから、⁽⁵⁾同時代人にとっては、必ずしも「忘れられた思想家」ではなかった。のみならず、晩年を過ごした父祖の地では豪農・村方役人層を指導した農政家として活動し、地域の農民に尊敬されつつ没した。⁽⁶⁾この事実から、彼の思想は、当時の凶作・飢饉、年貢過重や物価高騰に苦しみ、百姓一揆や打ちこわしを余儀なくされていた庶民の生活を強く反映していたと言えよう。

浮世絵師で、漢画をよくし、洋風画家として知られる蘭学者、司馬江漢（一七四七～一八一八）は、一八一二（文化九）年、随筆集『春波楼筆

『記』一巻を著わし、「人間感」と題する一文で、「予七十有余に及びて、始めて人間と云う事を知れり」、「吾日本は、天照大神人道を開き給ひけれ共、其古より此国の人ありて、獸と共に食を争ひたるを、大神日向の国、橿原の海浜に都を建て、人間の道を教へたるなり」、「然れば吾先祖も、其子孫にして、天子も我等も同物なり」、「上天子將軍より、下士農工商非人乞食に至るまで、皆以て人間なり」と論じた。⁽⁷⁾ 江漢は合理主義的な人間観に到達していたのである。

国学者に目を転ずれば、その大成者とされる本居宣長(一七三〇～一八〇二)は、人間性を尊重する態度で政治や社会の問題に着目した。一七八七(天明七)年、出生・居住の地、伊勢松坂を飛地とする紀州藩主徳川治貞に招致され、諮問に答え、『秘本玉くしげ』二巻を贈呈し、「百姓町人大勢徒党して、強訴濫放することは、昔は治平の世には、をさくうけ給はり及ばぬこと也」、「抑此事の起るを考ふるに、いづれも下の非はなくして、皆、上の非なるより起れり」と述べているのは、その一例である。もっとも、宣長の上申は「上下共に安全に榮えて、長久ならんことを願」う封建制肯定の立場からの論策であった。⁽⁸⁾ しかし、彼は百姓一揆や打ちこわしに理解を示し、きびしい政治批判を藩主に直言したのである。

勿論、近世社会では、後期においても、大きく動揺していたとはいえず、封建的身分制のもと、人間平等の思想を抱き、ましてやそれを実践することは例外中の例外であった。しかし、それが近代になって開花する先駆的な意義をもっていたと言うことは出来よう。

小考は、そうした近世後期における人間平等の思想と態度について、二人の人物の場合をとりあげる。

一、杉田玄白

前野良沢(一七二三～一八〇三)・杉田玄白(一七三三～一八一七)らに

よる一七七四(安永三)年の『解体新書』四巻・解体図一巻の刊行は、日本最初の西洋医学書の訳述で、のちの蘭学、ひろく洋学の發達に多大な貢献をした。

『解体新書』は厳密には翻訳とは言えない。その訳述の事情は、周知の通り、杉田玄白の回想録『蘭学事始』二巻に詳らかである。同書は一八一五(文化二二)年、玄白の晩年に成稿された。⁽⁹⁾

『蘭学事始』によれば、玄白は、一七七二(明和八)年春、いわゆる『ターヘル・アナトミア』・『カスバリウス・アナトミア』というオランダ語訳解剖書二冊を藩費で入手した。⁽¹⁰⁾ 蘭書を手にして、彼が「その図を实物に照らし見たきと思」っていたところへ、三月三日夜のことであったか、北町奉行の家士から、明日、千住の小塚原刑場で腑分がおこなわれるので「御望みあらばかのかたへ罷り越されよかし」と、手紙が届いた。そこで、玄白は、同僚の中川淳庵(一七三九～一八〇六)らに知らせるとともに、「相談にこそあれ、つねづねは往来も稀に、交接うとかりしかど、医事に志篤きは互ひに知り合ひたる仲なれば、この一挙に漏らすべき人にはあらず」と、多忙きわまりないなかを工夫して、夜半に良沢のもとへ使いを走らせた。⁽¹¹⁾

玄白は世話好きで、それ故に『解体新書』訳述事業の組織者たり得たのであるが、信実のある人格の持ち主であった。たとえば、友人の平賀源内(一七二九～一七九九)が、過って人を殺め、牢死した際、玄白は、彼の従弟とともに、江戸北郊、橋場村(現在、台東区橋場二丁目)の曹洞宗総泉寺に遺骸を葬り、のみならず、私財をもって墓標を建て、自ら「処士鳩溪墓碑銘」を撰し、刻ませている。⁽¹²⁾

良沢は豊前中津藩の藩医で、築地鉄砲洲の藩主奥平大膳大夫の中屋敷(現在、中央区明石町の聖路加病院)内に居宅を構えていた。⁽¹³⁾ 玄白は、若狭小浜藩のオランダ流外科の侍医甫仙の子として、江戸西部、牛込矢来の藩主酒井雅楽頭邸(現在の新宿区矢来町、矢来公園辺り)内で生まれ、蘭方

外科医術を学び、一七五七（宝暦七）年から日本橋で開業した。⁽¹⁵⁾

そこへ、「明和の初年のことなりしか、ある年の春⁽¹⁶⁾」、オランダ商館長の江戸参府中のこと、良沢が立ち寄り、彼の要望を容れ、商館長一行の常宿、日本橋本石町の長崎屋（現在、中央区日本橋室町四丁目）へ同道し、大通詞の西善三郎に面会した。しかし、西は、蘭方医玄白の問いに、オランダ語の習得は「御無用なり」、「理會するといふは至って難きことなり」と答えた。⁽¹⁷⁾良沢は、それ以後、青木昆陽（一六九八—一七六九）に蘭学を学び、一七七〇年には長崎へ遊学したのであるが、玄白は、「性急の生まれゆゑその説を尤もと聞き」、「徒らに日月を費すは無益なることと思ひ、敢て学ぶ心はなくて帰りぬ⁽¹⁸⁾」。彼はいったんは蘭語習得をあきらめたのである。

玄白は、六九年、父のあとを嗣いで待医となり、⁽¹⁹⁾日本橋小網町一・二丁目東の酒井氏邸（現在の中央区日本橋小網町）内に居住した。件の解剖の通知はこの居宅へ届けられたのである。彼は、藩医になった年、オランダ外科医の手術を見学して驚嘆したようであるし、⁽²⁰⁾古医方の山脇東洋（一七〇五—六二）門下の同僚、小杉玄適から師の腑分・観臓の実施を見学したことを聞き、解体の所見を記述した東洋の『臓志』も読み、「よき折りあらば」「自ら観臓してよと思⁽²¹⁾」っていた。折角のチャンス、勿論、前年、遊学した良沢に知らせずにはおられなかった。

良沢と玄白、それに玄白と同藩の淳庵ほかの友人たちは、三月四日と思われる日の早朝、浅草山谷町（現在、台東区浅草二丁目・東浅草二丁目）出口の茶屋に参集し、⁽²²⁾玄白の記述に誤りがなければ、山谷浅草町（現在、浅草二丁目、日本堤一・二丁目）を経て、汨橋^{（なだし）}を渡り、小塚原の仕置場へ向かった。茶屋では、良沢が「一つの蘭書を懷中より出だし、披き示した。それは、まぎれもなく、彼が長崎で買い求めた玄白所持と同版のいわゆる『ターヘル・アナトミア』であった。二人は「互ひに手をうちて感じ」入った。⁽²³⁾

一行は刑場に設けられた「観臓の場」へ赴いた。⁽²⁴⁾仕置場で解剖することになっていたのはえたの虎松であった。彼は、「このことの巧者のよしにて、かねて約し置⁽²⁵⁾」き、「その日もその者に刀を下さすべしと定めたるに」、「俄に病氣」になってしまった。

そこで、「その祖父なりといふ老屠、^{（きやう）}齢九十歳なりといへる者、代りとして出でたり。健かなる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手につけ、数人を解きたりと語りぬ」。「その日もかの老屠がかれのこれの」と指し示し、心、肝、胆、胃の外にその名のなきものをさして、名は知らねども、「何れの腹内を見てもこゝにかやうの物あり、かしこにこの物ありと示し見せたり」。「良沢と相ともに携へ行きし和蘭図に照らし合せ見しに、一つとしてその図に聊か違ふ⁽²⁶⁾」ところがなかった。

「古来医経に説きたるところの、肺の六葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異な⁽²⁷⁾」っていた。心を打たれた彼らは、「その日の解剖こと終⁽²⁸⁾」つてから、「とてもものに骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて、かずかず見しに、これまた旧説とは相違にして、ただ和蘭図に差へるところなきに、みな人驚嘆せるのみ」であった。

誤解が多いが、彼らも「その日の前述の腑分」と同様、「穢多に任せ」自ら執刀したのではなかった。しかし、彼らの態度は、「只今まで腑分けのたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりと疑はれ候御方もなかりし」と「老屠」が語った従来の医者⁽²⁹⁾のそれとは異なっていた。オランダ図と対照し、触れば穢れると思われていた骨を手に取り、おそらく「老屠」にかずかずの質問もしたであろう。良沢・玄白らは科学的・実証的な態度をもって解剖を見学したのである。

だからこそ、「帰路」、良沢・玄白・淳庵は「さてさて今日の実験、一々驚き入る。且つこれまで心付かざるは恥べきことなり」と「途中にて

語り合ひ、即座に「同志にて力を戮せ」、いわゆる『ターヘル・アナトミア』を「翻訳」しようと決意し、翌日、早速、良沢宅に参会、訳述の作業に着手した。⁽²⁹⁾

一同は「かねてよりこのことを心にかけ」、「蘭語並びに章句語脈の間のことを少しは聞き覚え、聞きならひし」良沢を「盟主と決め、先生とも仰ぐこと」としたが、たとえば、玄白は「いまだ二十五字さへ習」っておらず、「誠に臙脛なきの船の大海に乗り出だせしが如」き有様であった。⁽³⁰⁾

彼らは、あしかけ四年、奥平氏藩邸内に集り、学問的情熱を傾けた艱難辛苦の末、「遂に解体新書翻訳の業」を「成就」したのである。⁽³¹⁾

もとより、『解体新書』は、玄白自身が「今の如く思いよらず開けしところより見る人はさぞ誤解のみといふべし」と述懐している通り、誤訳が多く、それ故、高弟大槻玄沢（一七五七～一八二七）に後事を託し、改訂をおこなわせた。⁽³²⁾

しかし、玄白が、『蘭学事始』の冒頭、「今時、世間に蘭学といふこと専ら行なわれ」云々と筆をおこし、「今の如く思ひよらず開けしところより」云々と回想しているところに、彼の蘭学先駆者としての自負が窺える。「一滴の油これを広き池水の中に点ずれば散つて満池に及ぶとや。さあるが如く」、蘭学が「五十年に近き年月を経て、この学海内に及び、そこかしこ四方に流布し、年毎に訳説の書も出づるやうに聞けり」と誇っている。⁽³³⁾

勿論、良沢の学力なしには訳述の事業は開始出来なかったし、彼に対する藩主奥平昌鹿の庇護も軽視し得ない。⁽³⁴⁾しかし、玄白の学術集団の組織化の能力と努力なしにこの事業が成功しなかったことも確かである。その能力は蘭学の発展を期すること不可欠な情勢を見きわめて發揮された。それ故に彼は自負し誇りを持ったのである。『解体新書』が漢文で書かれていることは周知の通りであるが、それは「唐迄も渡候ば、其節

之為と存」じていたからで、⁽³⁵⁾訳述の不正確さはさておき、彼が訳述の歴史的意義を自覚していたことが理解される。

小塚原刑場で腑分をおこなった老えたは弾左衛門直轄の浅草新町の住人と見て間違いない。玄白は、封建的身分制下に生きているが故に、差別意識から自由ではなく、この老人を「老屠」、「彼奴」と称しているが、他方、「健やかな老者なりき」と呼んでいる。このことにとくに注目しないわけにはいかない。

『解体新書』訳述という大事業に契機を与えたとも言える老えたがいた。玄白は、半世紀前、おそらくは老いにやせながら、卑屈にならず、物にこだわらず、器用に小まめに解剖した彼のその道に熟達したすぐれた人格を克明に語っているのである。彼の印象が、自らも老い、八十歳を過ぎた玄白の脳裡に強くやきついていて、それで「健か」という表現が生まれたと言える。近世屈指の教養人、大田南畝（一七四九～一八三三）が多摩郡八王子の元横山（現在、八王子市元横山町）生まれの女性俳人、榎本星布尼（一七三二～一八一四）と会い、「健かなる老婆也」と評したのと同様、⁽³⁶⁾尊敬の念なしには発せられない言葉であり、老えたをそう評したところに玄白の進歩性を見出すことが出来る。

玄白は、これより先、一八〇二（享和二）年、『形影夜話』二巻を著わし、「人間と言ふものは、上天子より下万民に至るまで、男女の外、別種なし。然るを上下を分ち、夫々の位階を立、又其人々に名を命じ、四民の名目を定しものにして、人なることは同じ人なり」と述べ、⁽³⁷⁾すでに生物学的見地から合理主義の人間平等の自覚に達していたのである。

『解体新書』の訳述は洋学発達の上での画期的成果であるが、同時に蘭学を通じて玄白が自らのものにした合理主義的な平等感に注目したい。

二、川路聖謨

西伊豆^{へだ}戸田村からの富士山は美しい。同村の御浜崎に村立造船郷土資料博物館がある。岬の内側は波静かな海水浴場で、戸田港は天然の良港であるが、その奥に露艦建造記念碑が建っている。

一九六九(昭和四四)年に設立された博物館には川路聖謨(一八〇一～六八)の写真と江川英龍(太郎左衛門。一八〇一～五五)・プチャーチン(Efim Vasil'yevich Putyatin 一八〇三～八三)の肖像画が掲げられている。川路の写真はプチャーチンに同行した海軍士官が撮影したものだが、焼き付けの誤りで着物が左前になっている。

近世末、寒村戸田は日露交渉の地であった。ロシア提督プチャーチンと同行の皇族および上級士官の宿舎になった臨濟宗泉寺にはロシア語で刻まれた水兵の墓があり、日露和親条約交渉の際、一時、川路ら日本側とプチャーチンらロシア側との応接所に当てられた浄土宗大法寺には石標が立っている。

海軍中將・伯爵プチャーチン(当時、侍従武官長)は、一八五二(嘉永五)年、皇帝から日本との正式な通商開始と国境画定問題の解決を目的とする遣日大使に任命された。彼は外交経験の豊かな軍人であった。折からクリミア戦争(一八五三～五六)が勃発し、英・仏両艦隊の来襲の危険性がきわめて大きくなかを、五三年以来たびたび来日し、翌年十二月、下田で和親条約を締結した。その後、彼は、五八(安政五)年の修好通商条約の調印など、対日外交の功績で大將に昇進し、文部大臣・國務参議官を歴任、元帥ともなったが、打倒ツアーズムの運動の拡大により、夫人(イギリス人)とともにパリへ亡命した。アメリカ同様、ロシアも日本の開国を重視し、大物使節を派遣してきたのである。⁽³⁸⁾

ペリー(Matthew Calbraith Perry 一七九四～一八五八)は、地位こそ准将であったが、アメリカの「汽走軍艦の父」と言われている。彼は、五二年、大統領から東インド艦隊司令長官兼遣日特派大使に任命され、

五三年、最新鋭軍艦の大半を率いて浦賀沖へ来航した。彼は、二度目は、翌年(安政元年)一月、七隻で来日、三月、神奈川で和親条約を締結させた。両次とも、ペリー艦隊は世界最強の艦隊であった。⁽³⁹⁾

プチャーチンは、ラックスマン(Adam Kirilovich Laksman)やレザノフ(Nicolai Petrovich Rezanov)ら、過去の遣日使節の体験、あるいはゴロヴニン(Vasilii Mikhailovich Golovnin)の抑留事件と彼の著『日本幽囚記』に学び、江戸幕府の意向を尊重し、平和的に交渉する方針を採って、五二年九月にクロンシュタット港を出航した。ペリーは十月にノーフォーク軍港を出航して大西洋を横断、翌年三～五月、那覇から小笠原父島を経由し、那覇に艦隊を集結させ、六月、一挙に江戸湾に進入した。一方のプチャーチンは、敵国艦船の目を掠めながら、ペリー艦隊がいったん去った直後の七月、フリゲート艦バルダ号を旗艦に、軍艦・蒸気船・輸送船各一隻、計四隻からなる艦隊を父島で編成し、長崎港にはいった。彼は、ペリーより一ヶ月半早く出発し、一ヶ月半遅れて日本政府と接触したのである。プチャーチンは長崎奉行に幕府宛の国書を渡し、いったん上海へ行き、十二月、長崎へ再来した。日本側の緩慢さを熟知し、英・仏を警戒しての行動であった。⁽⁴⁰⁾

彼を相手にした幕府側の中心人物は川路聖謨である。川路は、浪人から豊後日田代官所に勤仕した内藤吉兵衛の次男に生まれ、父母とともに江戸へ出、父が幕府の徒士に採用されたため、牛込の徒組屋敷へ移り、そこで成長した。

一八一二(文化九)年、四谷に住む小普請組の御家人川路家の養子となり、翌年、数え十三歳で家督を譲られ、一七年、筆算吟味に合格した。翌年、小普請組にありながら勘定奉行管下に出仕したのを振り出しに、二一年、小普請組を抜け出し、これを契機に、聖謨は幕臣としての栄達の道を歩み出した。翌々年には勘定評定所留役に登用され、御目見得、すなわち旗本に昇格した。⁽⁴¹⁾

三五(天保六)年、老中直属の勘定吟味役に昇進、布衣(六位)の地位に登った。老中首座大久保忠真^(たけしげ)の拔擢によるものである。ついで四〇年、次の老中首座水野忠邦^(たけしげ)の推挙により、佐渡奉行に柴転、三郡の行政と鉱山経営の改革を実行した。⁽⁴⁸⁾翌年、任期を終えて帰府すると、小普請奉行に任ぜられ、従五位下に叙せられ、左衛門尉と称することを命ぜられ、諸大夫(五位以上)に列せられた。⁽⁴⁹⁾忠邦による天保改革が開始された年のことである。

川路は、四四年、普請奉行に昇進した。⁽⁴⁹⁾しかし、同年、忠邦は上知命令に反対されて老中首座を追われ、翌年(弘化元年)、いったんは返り咲いたものの、四六年、再び罷免され、蟄居・急度慎の処分を受けた。その結果、川路は奈良奉行に左遷された。⁽⁴⁸⁾奈良奉行は任期がない。実母が江戸に残り、妻と養父母らが同行、赴任した。⁽⁴⁶⁾

しかし、五一(嘉永五)年、大阪奉行(東町)に柴転、一年余の在勤のち、勘定奉行(公事方)に昇進し、⁽⁴⁹⁾海防掛を兼帯させられた。⁽⁴⁹⁾勘定奉行は、町奉行(江戸)と同様、禄高三千石の役職である。川路家の世襲家祿はわずかに二百俵。それが五百石に加増され、職祿として不足の二千五百石が足高された。五二年、川路は幕府中央の高官に拔擢されたのである。

ブチャーチン来航の急報に接した阿部正弘ら幕閣は、十月、西丸留守居筒井政憲・川路ら四名に長崎表への出張を命じた。筒井の前職は蛸社の獄当時の町奉行(江戸南町)で、名奉行の一人に数えられている。海防掛でもあった筒井は大目付格に、聖謨は勘定奉行勝手方にそれぞれ転じ、両名は四位相当の地位を与えられ、老中の代理として全権を託され、幕府の重臣と称することも許可された。⁽⁵⁰⁾

日露両国の全権一行は、十二月十四日、長崎奉行所で儀礼的に初会見し、日本側からの饗応があった。十七日、ロシア側が旗艦で答礼の饗宴を催し、十二月二十日に交渉が開始された。⁽⁵¹⁾

日本側全権は高齢の筒井が上席であったが、彼は非常事態を心得てくだわらず、川路中心に相手方との交渉をすすめた。ブチャーチンの秘書・報道担当として乗り組んだのちのロシアの文豪ゴンチャロフ(Иван Alexandrovich Gontcharov 一八二九—一九一)はすでに文壇で認められていたが、その著『日本渡航記』(Fregat-Palade II 原題『フリゲート艦「パルダ」号』上下八・一八五七年)で川路について次のように述べている。⁽⁵²⁾

彼はその人格と外交手腕を高く評価されていたのである。

「川路を私たちは皆好いてゐた」、「川路は非常に聡明であった。彼は私達自身を反駁する巧妙な論法をもつて、その知力を示すのであったが、それでもこの人を尊敬しない訳には行かなかった。その一語一語が、眼差しの一つ一つが、そして身振りまでが、すべて常識とウィットと、烟敏と、練達を示してゐた」、「談判は川路が一人で背負つてゐた。

聖謨の異例とも言ふべき柴達は彼自身の努力と誠意によるものであった。剣術と体操を日課とし、何よりも勉学に励んだ。遠国奉行として、行政・裁判の公平を期し、反省と自戒を怠らなかつた。また、出石藩の内紛など、難事を適切に処理した。だから各幕閣のみならず、徳川斉昭ら有力大名からも信頼された。川路は人情に篤い人であった。幼少のころ、貧困の辛酸を嘗め、苦勞人であった彼は、たとえば遠国奉行在任中、自らの日常諸経費を儉約し、貧民・病人の救済のために用立てている。また、実母・養父母に孝養を尽し、愛妻家で、弟井上清直^(きよなお)に思いやりのある兄であった。⁽⁵³⁾

封建道徳下のこととはいえ、右のような川路の人物は、『佐渡日記』・『寧府紀事』など、日本史籍協会編『川路聖謨文書』八冊所収の日記類に詳らかだが、そのような人格の持ち主故に、彼はすぐれた知友にも恵まれた。水戸学派儒者藤田東湖、福井藩主松平慶永のブレーン横井小楠、兵学者佐久久間象山、佐賀藩主鍋島直正らがそれである。

わけでも、田原藩家老渡辺華山（一七九三—一八四二）を中心とする洋学に通ずる知識人群との親交は、彼を西洋事情に明るい官僚に育てた。

川路は華山・東湖・小楠・象山とともに朱子・陽明両学に通じた佐藤一斎門下であった。華山のもとに集まったのは、川路のほか、親友で華山代官の江川英龍、房総代官羽倉外記らである。羽倉はのちに勘定吟味役に昇進し、上知令を建議、水野の失脚により、罷免されたのち、学問に生きた。彼らは、飢饉が続き、百姓一撓や打ちこわしが激化し、欧米列強が日本沿岸に接近する情勢のもとで、シーボルト門下の高野長英らの協力を得て西洋を研究していた華山から国際的視野に立った内外情勢とその分析を学びつつ、政策を検討しようとしたのである。⁽⁵⁵⁾

折しも三七（天保八）年、モリソン号事件がおこり、翌年夏、華山は『慎機論』（未定稿）を執筆、秘かに「井蛙管見」の鎖国政策を国際情勢の分析に基づいて根本から批判し、長英は『戊戌夢物語』を著して異国船打払令の実行を非難した。『夢物語』の写本が流布し、老中水野の命で目付鳥居耀蔵（忠鸞）の探索が開始された。⁽⁵⁶⁾

平素、蘭学者と蘭学に傾倒する有能な幕臣を敵視していた鳥居は、部下に華山らを内偵させ、三九年、華山を逮捕した。長英はいったん身を隠したのちに自訴した。鳥居の捜査は水野の信任篤い江川・川路・羽倉らに及んだ。しかし、華山らが大塩平八郎の乱（三七年）と結びつけようとした鳥居の謀略は多くが事実無根であると判明した。開明派幕臣は水野政権の支柱でもあり、彼らから犠牲者は出なかった。だが、同年末、華山と長英は右著述を証拠に幕政批判の唯一点によって有罪とされ、華山は国元三州田原（現在、愛知県渥美郡田原町）へ永蟄居、長英は永牢となった。遡ること十年前のシーボルト事件と並ぶ洋学への弾圧事件、いわゆる蜜社の獄である。⁽⁵⁷⁾

華山は、翌年初め、田原に護送され、家族と生活したが、藩主への迷惑がかかることに苦悩し、四一年秋、自刃して果てた。長英は、四四

（弘化元）年、小伝馬町（現在、中央区小伝馬町）の牢屋敷の雑役に従事していた非人栄蔵に放火を頼み、脱獄した。一時、宇和島藩主伊達宗城の招聘で同地へ赴いて蘭学を講じ、のち、変容・変名して江戸に戻り、五〇年秋、青山百人町（現在港区南青山五丁目）の自宅を捕り方に包囲されて自殺した。⁽⁵⁸⁾

華山は絵面の門人椿椿山宛遺書に、自らの死について「数年の後一変も仕り候はは悲しむ可き人も之有る可きや」と認めた。開国まであと十余年、彼は近い将来を見通していたのであろうか。江川は学識豊かな親友を悼み、夜明けの富士に喻えて絵を描き、「里はまた夜深し富士の朝日影」と画賛を付し、先駆者を讃えた。⁽⁵⁹⁾ 川路もまた、四九（嘉永二）年、日記中に自らの勘定吟味役当時を回想し、亡友「渡辺華山西洋にて戦艦をつくることをしりて、いづれにも唐と日本との大患なるへしとて甚敷患ひて、我浦々懸（掛）に相成候事を大に悦びて色々いひき。其頃は華山などは氣違ひのごとく世にいひしを華山いたく思ひて、思ひに堪かねて密に書を讀して大罪人となり、われらも既に危きめに逢き。先見の明なるものははじめは氣違ひのごとくみゆるもの也」と記している。⁽⁶⁰⁾

このような華山と親友を結び、国際情勢にかなり通じていた川路ではあったが、第三回の交渉で、将来、条約を結ぶ場合、他国と同一条件で締結すること、最惠国待遇を与えることを約束してしまった。長崎での交渉は五四（安政元）年一月四日まで都合六回おこなわれたが、プチャーチンは、クリミア戦争の激化のため、交渉を中断し、一月七日、長崎を出港、英艦隊の襲来を避けて、長崎に再来したが、月末に出港し、沿海州を北上、五月、インペラートル港（現在、ソビエツカヤガバニ港）に入港して艦隊を解散した。一方、川路らは江戸への帰途、日米和親条約の締結を知り、愕然とした。⁽⁶¹⁾ これはプチャーチンも同様で、彼は新たな決意をもって、八月、新鋭フリゲート艦ディアナ号（二千トン）一隻で、

同港を出航、箱館・大坂へ廻航のあと、十一月十五日、下田に入港した。⁽⁶²⁾

プチャーチンの来航の翌々日、大目付筒井と川路の両全権以下が下田へ急行、二十三日に着いた。長崎交渉の結果に基づき、樺太へ調査に赴いた勘定吟味役村垣範正（一八三三—一八〇）も同行した。⁽⁶³⁾ 彼は川路に心服していたが、御庭番小十人格から出発して外国奉行・勘定奉行などを歴任、日米修好通商条約批准書交換の遣米使節団に副使として加わった人物である。

第一回交渉は下田の福泉寺で十一月三日に開催され、国境問題と絡めて通商開始を要求するプチャーチン、通商、下田以外の寄港を拒否する川路、二人の激論が展開された。ところが、翌日朝、安政の大地震がおこり、下田港は人家も船も壊滅状態となった。⁽⁶⁴⁾ ディアナ号も大破した。

川路は被害状況および日露代表一行の無事を幕閣に急報したが、ロシア側から艦の修理港の提供の申し入れがあった。これは開国絡みの重大事であり、川路は、幕閣の指示を得るべく、村垣を出府させた。⁽⁶⁵⁾

その間、十一月十三日に伊豆賀茂郡柿崎村（現在、下田市）の玉泉寺で交渉を再開したが、ディアナ号修復問題に話題が集中し、十四日の第三回で中断した。⁽⁶⁶⁾ 下田の長楽寺における十二月十三日の第四回を経て、十五日の第五回交渉で国境問題も合意に達し、二十一日、同寺で日露和親条約が調印された。⁽⁶⁷⁾ その内容は、周知の通り、エトロフ島とウルップ島の間を国境とし、樺太は国境を分たず、従来通り（雑居）とする（第二条）、日本政府はロシア船のために箱館・下田・長崎を開港する（第三条）などである。

一方、ディアナ号修理の方は、双方の合意に基づき、指定地を選定された戸田港への廻航中に沈没したため、ロシア人の指導のもと、戸田の船大工が彼らの帰国船を建造することになった。およそ八十日を費してわが国最初の洋式船（約百トン）が完成した。その総指揮をとり、条約

交渉に臨みつつ、地震・津波後の民政に東奔西走する川路は、ロシア側から信頼され、実力と識見を高く評価された。戸田滞在のロシア側一行五百余人の警護の中心は江川で、彼は川路の推挙で勘定吟味役格となり、自ら造船を監督した。彼は、オランダ語を解し、目付、ついで町奉行（江戸南町）となった鳥居と対立しつつ、洋式測量で成果をあげ、高島秋帆の洋式砲術の採用に尽力するとともに、品川台場建設の重責を果たすなど、幕臣中、屈指の開明的能吏であった。⁽⁶⁸⁾

プチャーチンは新造のスクネール船の寄贈に深謝し、ヘダ号と命名した。彼は、百人余の部下とともに、三月二十日、戸田を出港、帰国の途についた。ロシア政府は、日本への答礼として、ヘダ号と同型のスクネール船を建造し、大砲五十二門を添えて幕府に贈り、謝意を表わした。⁽⁶⁹⁾

これより先、二月末、戸田滞在のロシア海軍の一部軍人はアメリカ船をチャーターして出帆、無事帰国した。しかし、他の一部はドイツ船を利用したが、帰途、敵艦に拿捕され、捕虜となった。⁽⁷⁰⁾

その間、二月三十日、川路は養父死亡の報に接した。しかし、公務繁忙の極にあるため、將軍の主旨をもっただちに喪を解かれ、政務に専念した。彼は蕃所翻訳御用・貿易事務取調掛などを命ぜられ、洋学所（のちに蕃書調所と改称）の設置、アメリカ総領事ハリスとの対応に終わった。軍艦操練所（海軍学校）の監督も命ぜられたが、実務は外国奉行永井尚志が担当した。五七（安政四）年、川路は勘定奉行首座となった。一方、井上清直は、五五年、勘定吟味役に登用され、下田奉行補佐として兄聖謨を輔け、同年、下田奉行に昇進、諸大夫に列せられ、外国奉行岩瀬忠震らとともにハリスとの交渉の任に担った。⁽⁷¹⁾

蜜社の獄で難を逃れ、水野失脚の際にも切り抜けた川路は、五八年、井伊直弼の大老就任直後、西丸留守居に左遷された。閑職故、孫の太郎（寛篤）とともにオランダ語を学び、蘭書の研究をはじめた。さらに翌年、井伊から罷免・隠居・永蟄居を命ぜられた。ともに永蟄居の処分を

受けたのは作事奉行の岩瀬、軍艦奉行の永井であった。⁽⁷²⁾

川路は元来漸進主義者である。友人羽倉立案の上知令には、有力な旗本では、大目付遠山景元らとともに反対し、結果として、彼を信頼する水野を老中首座からおろすことに手を貸した。漸進主義の彼は、開国派ではあったが、強行しようとする井伊の方針を肯定しなかったであろう。しかし、開国そのものに反対ではなかった。したがって、井伊から処分を受けたのは、將軍繼嗣問題で、旗本中では、岩瀬らともっとも強く一橋慶喜を推したからである。外交問題で意見を異にした慶喜の父齊昭の信任も篤く、彼は水戸派と見られたのである。

井伊の大老就任以前、川路は老中堀田正陸^{まさむち}に対し、將軍繼嗣問題とともに、開国推進を建言していた。堀田は將軍繼嗣に慶喜を推し、通商条約の勅許を得ることに失敗したため、井伊に罷免されたが、川路の漸進主義も井伊に容れられるものではなかったのである。

五九年、川路は幕命により小石川の邸宅を開け渡し、表六番町の小邸へ移った。この前年、聖謨は神田お玉ヶ池の所有地（現在、千代田区岩本町二丁目）を種痘館の建設用地として無償で提供した。ところが、種痘館を設立した用地を差し出せとの幕命がくだった。彼は代替地を要求せず、これに従った。⁽⁷³⁾

安政の大獄のあと、六〇（万延元）年三月、井伊は桜田門外の変で遭難した。川路は外出を許可され、六三（文久三）年五月、外国奉行・勘定奉行格に任ずる旨、沙汰があった。対外的に多端な折から彼の経験が認められたのであるが、長州藩の外国艦船砲撃事件、薩英戦争等々、つぎつぎおこる難問は聖謨の手腕がいかにせる性質のものではなかった。十月、聖謨の俸禄を辞する願書が受理された。辞任後の川路は、六六（慶応二）年、中風症に罹り半身不随となった。⁽⁷⁴⁾

翌年、將軍徳川慶喜が朝廷に大政奉還を願い出たが、一方では討幕の密勅がくだり、六八（明治元）年一月、戊辰戦争がはじまった。川路は

主戦論に与しなかった。しかし、一方で、孫の太郎を幕府のイギリス留学生に加えながら、三月十五日、新政府軍に江戸城を開城したとの誤報に接し、ピストルで喉を撃ち、自殺した。右手だけで短刀を持ち、腹部を横に傷つけ、切腹の式例をおこなった上でのことである。⁽⁷⁵⁾

川路聖謨は、將軍繼嗣と開国推進について、老中堀田にそうであったように、幕閣に直言することが少なくなかった。『大日本古文書 幕末外国関係文書』中に見える川路とプチャーチンの応酬は克服に記されており、すざまじいものがある。西洋事情を学んだ川路は、ロシア人への偏見を持たず、これを怖れずに反論し、誠実な態度で応対した。人間と人間との交際であるべくつとめたのである。

『寧府紀事』は、『川路聖謨文書』八冊中およそ半ばを占め、聖謨が毎日の人事・出来事・感想を日記に認めて在府の実母に送ったものである。百姓・町人など、庶民の記事は多く、彼が下々に注意を払っていることが知られる。長吏・番非人など、賤民身分の人びとの記事も少なくない。

「上方は長吏といふものに吟味させ、其下はみな番非人にて、番非人といふものはみな盗人の上前取也」と彼らをきびしく見ており、⁽⁷⁶⁾「肴屋など、長吏を苗字附に呼と也」と長吏の増長ぶりを批判している。⁽⁷⁷⁾これらは賤民身分の者に対してだけの態度ではなく、理非曲直を糾そうとする川路の正義感に基づくものである。奉行所の役人にはとくにきびしく、その末端に組み込まれている賤民身分の者に対しても同様な態度で臨んだと見るべきである。

事實は、他の人びとに対すると同様に、賤民身分の人びととの接触はあたたかな人間的なものであった。たとえば、奈良奉行所に仕える長吏につき、「大和国山辺郡永原村 老農中村直三云」には「既ニシテ大坂奉行ニ転ゼラルル発程ノ昨、長吏を召シ厨所ニ於テ離盃ヲ賜ハル」と見える。⁽⁷⁸⁾一般に、賤民身分の者は庶民の家でさえ屋内にはいることが許さ

れない場合が多かった。そういう時期の「厨所」における「離盆」とは人間と人間との別れである。また、川路の執政により、盗賊が減少し、そのため生活費に窮する番非人が出現した。これに対しては、訴えがあったのち、はやく犯人を捕えた場合、即日褒美銭を与えることとした。牢内の飯料が少なくて済むようになったため、残った費用を褒美銭に当てるだけで充分間に合ったと言われる。『寧府紀事』にはえたについての記述も多く、役務外の交際もしており、出入の一人を「此穢多、余程志有⁽⁸⁰⁾レ之ものゝ鉢也」と評している。

だからこそ、川路が江戸から長崎へ赴く道中日記のなかに記しているように、「草津宿になら長吏共罷出候をはじめにて、瀬多のはしの辺にて、花井隆助并喜三郎等参りたり」、「喜三郎其外道路に平服して、泣々、御機嫌よろしく」という故に、予も亦、あわれに成りたり」というような、大人数の行列を仕立てて進む道中駕に乗った三千石の御殿様と賤民身分の人びととの人間的な別離の光景が出現した。奈良から大津まで勘定奉行を途中で見送るなど、並大抵では出来ない。そこに、封建道徳の枠内であるとはいえ、庶民・賤民と川路とのあたたかい人間関係を見出すことが出来る。

結語にかえて

杉田玄白は蘭方医として合理主義的な人間観を自らのものにしていった。そのことが老えたに對する表現のなかに象徴的に示されている。幼いころから苦勞しながら成長し、曲折あったが、幕臣として栄達の道を歩んだ川路聖謨は、自らの体験を人間として正(プラ)の方向へ活かしていった。それに西洋事情に對する積極的な学習もした。それ故に賤民身分の者たちと人間的な交際が出来たし、だからこそ、ゴンチャロフの人物評に見られるような「尊敬」を得、プチャーチンと堂々たる応酬も可能だったのである。

小林一茶(一七六三—一八二七)は、管見では、えたや非人・乞食、祝福芸にたずさわり賤視された人びとの生活や哀歓を二百首余り詠んでいる。⁽⁸²⁾ 彼が蔑視された人びとを人間としてあたたかい目でとらえているのは祖母の孫育てと無関係ではないと思われる。福沢諭吉が天賦人權思想をもとに人間の平等を高唱した原点には人を人として平らに見る母順⁽⁸³⁾から継承した資質と彼女の教育がある。

この点、玄白はわからないが、川路は苦勞人でしっかり者でやさしかった実母の影響を強く受けて成長した。いずれにせよ、人道主義的人間形成にとって幼児教育がいかに大切であるかを示していると言えそうである。しかし、このことは、歴史的には、今後、追究していくべき課題である。

「人間観」と題しながら、玄白や川路の人間関係に深入りし過ぎた感を禁じ得ない。自省しつつ、擱筆する。

〔註〕

(1) ここでいう近世後期とは十七世紀からの近世後半期を指す。

(2)・(3) 稿本『自然真營道』一「大序」・「自然の世の論」(『安藤昌益全集』第一巻八一九八一年、校倉書房)所収。稿本写真版をもとに筆者が送り仮名を加筆した。なお、『自然真營道』において、昌益は天照大神信仰を神道とはとらえず、天皇を君主に加えてはいない。擄取者と理解していないためである。したがって、徳川光圀らの「尊王敬慕」の本来的な尊王論と質を異にするが、昌益の思想は尊王論の系譜に属すると言えよう。

(4) 『自然真營道』と昌益の思想が知られることになったのは、一八八九(明治三二)年、狩野亨吉がその稿本を入手し、論文「安藤昌益」(岩波講座「世界思潮」第五冊八一九二八年、『狩野亨吉遺文集』一一九五八年、岩波書店)による(所収)で紹介してからである。

(5) 頼祺一「『自然世』の構想」(『日本民衆の歴史』第四巻八一九七四年、三省堂)所収。

(6) 三宅正彦編『安藤昌益の思想的風土 大館二井田民俗誌』(一九八三年、

そして、九・二〇～二四頁。

(7) 「春波樓筆記」(『日本隨筆大成』第一巻／一九二七年、吉川弘文館) 所収。文中、「七十有余」とあるのは、晩年、江漢が九歳年齢を加算したためである。

(8)・(9) 「秘本玉くしげ」(『本居宣長全集』第八巻／一九七二年、筑摩書房) 所収。

(10) 今日、われわれが手に出来る『蘭学事始』は野上豊一郎校註による岩波文庫版(一九三〇年刊)が最初のものであるが、その後、緒方富雄らがこの著の復原作業にとりくんだ。その成果は「復原作蘭学事始」(『医学のあゆみ』第一巻第四号／一九五一年四月)としてまとめられ、これに多少の修正を加えた緒方校註・解説の岩波文庫版が刊行された。小考の『蘭学事始』からの引用はすべて緒方版第二六刷(一九八〇年)による。

(11) 前掲『蘭学事始』二二～二四頁。ただし、『ターヘル・アナトミア』は正式の書名ではない。にもかかわらず、教科書・辞典などに『解体新書』を『ターヘル・アナトミア』の翻訳としているものが少なくないので一言しておく。

この書の正しいオランダ語名は『オントレド・キニンジ・ターフェレン』(Ontleedkundige Tafelen 「解剖学表」)で、ドイツの解剖学者ヨハン・アダム・クルムス(Johan Adam Kulmus)の原書「アナトミッシェ・タベレン」(Anatomische Tabellen)を、ラッス・ディクテン(Gerardus Dichten)がオランダ語訳し、ヤン・ファン・ワスベルヘ社(Janszoon van Waesberge)が一七三四年に刊行した。『カスバリウス・アナトミア』もファン・ワスベルヘ社(Casparus Bartholinus)著「アナトミア・ノヴァ」(Anatomia nova 「新解剖学」)のことである。

(緒方前掲校註参照)

(12) 前掲『蘭学事始』二五～二七頁。

(13) 水谷不倒『平賀源内』(一九七七年、中公文庫) 原本に同人著『平賀源内』(一八九六年、裳華書房) 一五・七六～八四頁。「鳩溪」は源内の号。総泉寺は関東大震災で焼失し、一九二九(昭和四)年、北豊島郡志村(現在、板橋区小豆沢)へ移転した。源内の墓は橋場に残されたが、少し動かされ、形も玄白建立のものと変わっている。

(14) 同藩上屋敷は御浜御殿(現在、中央区浜離宮公園)の北西隣りにあり、

近かった。

(15) 「蘭学事始 年表」(前掲『蘭学事始』所収)。

(16) 一七六六(明和三) 年春と推定される(緒方前掲校註)。

(17) 前掲『蘭学事始』一六～一七頁。緒方前掲校註。長崎屋跡は、現在、中央通り、江戸通り交差点北西角で、東邦生命ビルが建っている。

(18) 前掲『年表』。前掲『蘭学事始』一八頁。

(19)・(20) 前掲『年表』。

(21)・(22)・(23)・(24) 前掲『蘭学事始』二五～二七頁。

(25) 小塚原刑場は、旧奥州街道沿い西側の田中にあった(現在、荒川区二・五丁目、都バス南千住車庫からJR貨物線通り)。江戸外郊の刑場は北方の浅草北部の千住南組と南方の品川南部の鈴ヶ森とにあり、えた頭弾左衛門の総支配のもと、主として浅草の非人頭車善七および品川の非人頭松右衛門手下の非人が処刑の下役人足に従事させられた。浅草北部の刑場は、もと日本橋本町にあり、鳥越から聖天町を経て小塚原に定着した。(拙稿「小塚原刑場(仕置場)跡」／『東京部落研究会報』九四号、一九七八年九月) 拙稿「弾左衛門」／『部落史用語辞典』一九八五年、柏書房) 一頁。

(26)・(27)・(28)・(29)・(30) 前掲『蘭学事始』二七～三一頁。

(31) 前掲『蘭学事始』三五頁。『解体新書』(一七七四年刊)は、「凡例」に、いわゆる「ターヘル・アナトミア」のほか六種の参考解剖書をあげ、五種の解剖書の附図を引用したと述べている(『解体新書』／『日本思想大系』第六五巻／一九七二年、岩波書店) 所収)。また、『新書』の附図を描いたのは玄白の友人で、絵画を源内に学び、秋田蘭画の始祖となった小田野直武である。ただし、彼は、かの有名な序図を右の十一書とはまったく別の書物、すなわちワルエルダ(Valerda)著のラテン語の扉絵を模倣して書いた(大島蘭三郎「解体新書の絵とびらの原図について」／『医学のあゆみ』第一八巻三三、一九五四年九月)。

ところで問題は、本文四巻・附図一巻の各巻頭に訳述関係者の氏名が記されているのに、良沢の名が見えないことである。玄白は、良沢につき、「この先生、生涯一日のごとく、確乎として動かざりしゆゑ」「新書」訳述の「業を遂げしもあることと思はるゝなり」と業績を讃えつつ、蘭学を「終身の業となし、尽くかの言語に通達し、その力を以て西洋の事情を知り、かの群籍何にても読み得たきの大望ゆゑ」「世間浮華の人に多く交はることを厭ひた

り」と評している。これに対比するかのうちに、自分については、何よりもまず蘭書の内容の「一事を早く」あきらかにし、「治療の用を助けたく、また、世医諸術発明の間にも用立やうになしたき志のみなりければ、何とぞ一日も速かにこの一部見るべきものとなしんと心掛け」たと述べるのとともに、「蘭説を翻訳しても人のはいく理解し曉解する益あるやうになすべき力はなし。されども、人に託してわが意を通じがたく、やむことなく拙陋を顧みずして自ら書き綴れり」と記している。(前掲『蘭学事始』三七・四〇・四二頁) 良沢は、長崎遊学の時期であらう、道を究めずして有名になる手段にしないと、大宰府天満宮の神前に誓ったとして、玄白が『新書』の「序」を書くよう求めたのを断ったと言われ(緒方前掲校註)、兩人の師である吉雄耕牛(一七二四〜一八〇〇)が書いた。彼の「序」は良沢・玄白両名の功績を賞讃している(『解体新書』を刻するの序)。(前掲『解体新書』)。良沢の目立とうとしない性格と態度は、現在、杉並区梅里二丁目の曹洞宗慶安寺(関東大震災後、下谷区へ現在、台東区へ池端より移転)にある墓標にも窺われる。彼は前野家の一員として同じ石碑の下に葬られただけである。

付言すれば、中津藩出身の福沢諭吉(一八三四〜一九〇一)が藩命で慶応義塾の前身となる蘭学塾を開いたのは五八(安政五)年で、良沢宅と同じく、鉄砲州の中屋敷である。現在、聖路加病院南の道路(十字路中央)に蘭学創始と慶応義塾発祥の記念碑がある。

(32) 前掲『蘭学事始』四三・四七〜四八頁。玄白は自ら入門した玄沢の「人と才とを愛し」、「直ちに良沢翁に託した。彼は「程なくかの書を解することの大概を曉」り、のちに長崎にも遊学した。(前掲『蘭学事始』四七頁) そして、のちに『新書』の改訂をおこない、一八二六(文政九)年、『重訂解体新書』(四巻・新定名義解四巻・附二巻・鳩盧慕斯解体譜一巻、計十一巻)を刊行したが、この重訂版では、初版の解剖図が木版であるのに対し、銅版になっている(国立公文書館蔵)。玄沢の主筆『蘭学階梯』二巻(一七八三年成稿)は蘭学の入門書としてその普及に大きく寄与した。これらのオランダ語学書には、すでに体系化されていた良沢の著作が深い影響を及ぼしている(松村明解説『日本思想大系』第六四巻―一九七六年、岩波書店所収)。

(33) 前掲『蘭学事始』五八〜五九頁。「蘭学といへる新語」は良沢・玄白らの「社中にて誰いふともなく」「首唱」され、「自然と通称とな」ったと言う

(前掲『蘭学事始』三五頁)。蘭学は、鎖国中、オランダを通じて摂取した西洋学で、洋学は開国期に成立を見た西洋学を指すと言うことが出来る。

(34) 前掲『蘭学事始』三八頁。

(35) 『和蘭医事問答』(前掲『日本思想大系』第六四巻所収)。「解体新書」の各巻頭の人名の上にも「日本」とある。

(36) 『玉川砂利』(『蜀山人全集』)新百家説林第三巻八一九〇七年、吉川弘文館所収。南畝(蜀山人)の言をご教示くださったのは杉仁氏である。

(37) 『形影夜話』(前掲『日本思想大系』第六四巻所収)。

(38) 拙稿「近代史を歩く 5」(『月刊部落問題』一四二号、一九八八年九月)。

(39) 加藤祐三『黒船異変——ペリーの挑戦』(一九八八年、岩波新書)四五・五二〜六頁。当時の狂歌には四隻とも蒸気船であるかのように詠まれているが、実際は二隻であった。再来時にはポーハタン号(二四一五トン。五二年建造)も姿を現わした。ペリーは、オランダ商館のドイツ人医師シーボルト(Philipp Franz von Siebold)が収集した高価な日本地図を購入し、彼の

主著『日本』(分冊一八三二〜五二)を研究、来日して幕吏に接した前任の提督らの体験を分析した。(前掲『黒船異変』三三〜四頁)

(40) 前掲『黒船異変』五〇頁。大橋与一『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』(一九七四年、東海大学出版部)五四〇〜三頁。

(41) 川路寛堂編述『川路聖謨之生涯』(一九〇三年、吉川弘文館)一七頁。

(42) 前掲『川路聖謨之生涯』二一〜二五・五〇〜五八頁。

(43)・(44) 前掲『川路聖謨之生涯』七二〜四・八三頁。

(45) 前掲『川路聖謨之生涯』八七頁。

(46)・(47)・(48)・(49)・(50) 前掲『川路聖謨之生涯』八九・一八七・一九八〜九・二〇一・二二五〜六頁。

(51) 前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五四五頁。前掲『川路聖謨之生涯』二四七〜五四頁。

(52) ゴンチャロフ著、井上満訳『日本渡航記』(一九四一年、岩波文庫)三二四〜五頁。

(53) 川路の愛妻家ぶりにはゴンチャロフも舌を巻いている(前掲『日本渡航記』三二三〜四頁)。

(54) 華山は江戸半蔵門外田原藩上屋敷(現在、千代田区隼町。最高裁判所に

なっている。三宅坂は田原藩主名に由来する。内で誕生し、邸内の高台に居室があった。最高敷前に華山の記念碑がある。

- (55)・(56)・(57)・(58)・(59) 前掲『近代史を歩く 5』。長英が鎖国政策を否定していないことは『夢物語』(『華山・長英論集』八一九七八年、岩波文庫▽所収)を通覧すればあきらかである。教科書・辞典類に華山らが尚齒会という団体を組織したと見えるが、これは長英獄中の著述『蛮社遭厄小記』(前掲『華山・長英論集』所収)に基づく誤解であり、事實は結社はなく、華山を中心に個人的に交際していたのである(佐藤昌介解説△前掲『華山・長英論集』▽所収)。

- (60) 『寧府紀事』第四(『川路聖謨文書』五八一・一九六八年、東大出版会▽三八二)三頁。草の「華山」とあるが、本人が山「華山」に一定したのは三十五歳からで、歴史書がこれに統一したのはここ数十年来のことである(森統三『渡辺華山』八一九七八年、岩波文庫版。原版一九四一年▽四四頁)。したがって、川路が草「華山」を用いているのは誤りとは言えない。

洋学の弾圧の対象となった人物は、華山、長英のほか、同じくシーボルト門下の小関三英、シーボルト事件での幕府天文方高橋景保、十一代将軍家斉の眼科医士生女領等々、多数にのぼる。勝安芳は師であり義弟である象山の非業の最期を悼み、象山著の「序」に「花之先ニ於春者、為殘霜、所ニ傷ヲ、説之先ニ於時ニ者、為旧弊、所ニ厄。雖レ然、不レ有先者、則後者何ヲ、驚起乎」(『省書録』八一九四四年、岩波文庫▽八五頁)と記した。象山のみならず、犠牲となった先覚者の多くに言い得ることである。返り点・送り仮名は筆者が付した。

- (61)・(62)・(63) 前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五四七・六〇・五五八・六〇・六〇頁。

- (64) 前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五六〇～二頁。前掲『川路聖謨之生涯』三五九～六〇頁。

- (65) 前掲『川路聖謨之生涯』三六二～七〇頁。

- (66) 前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五六三頁。

- (67) 前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五六三～七頁。前掲『川路聖謨之生涯』三八七～八頁。

- (68) 前掲『近代史を歩く 5』。

- (69) 前掲『近代史を歩く 5』。前掲『川路聖謨之生涯』四九九頁。

- (70) 前掲『川路聖謨之生涯』四一八頁。前掲『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』五七七八頁。

- (71) 前掲『川路聖謨之生涯』四一三・四二四～五・四二八～九・四七五～六・五二二・五五七～九頁。

- (72) 前掲『川路聖謨之生涯』六〇八～一〇・六三二～四頁。

- (73) 前掲『川路聖謨之生涯』六三九・六一五～一六頁。旧お玉川池畔に「お玉ヶ池種痘所記念」碑が立っている。種痘所はわずか半年にして下谷和泉橋通りに移り、六〇(万延元)年、幕府直轄になって、翌年、西洋医学所と改称された。

- (74) 前掲『川路聖謨之生涯』六六一・六七二・六七九頁。

- (75) 前掲『川路聖謨之生涯』七〇〇・六八一・七〇一～二頁。

- (76) 前掲『寧府紀事』第二(一九六七年)三三頁。

- (77) 前掲『寧府紀事』第一(一九六七年)三九七頁。

- (78) 奈良県天理市検垣町、式田公昭氏所蔵文書。非人番直三は、川路に身分をわきまえずに上申し、「敬礼ヲ失」したとされたが、「呵り」の処分で済み、「謝罪」して「家ヲ辞」し、のち、役務に復帰している。明治維新後、彼が篤農家として成長したことには川路の人格的影響が窺える。

- (79) 前田一良「川路聖謨のこと」(同人著『日本近世思想史研究』八一九八〇年、文一総合出版▽所収)。

- (80) 前掲『寧府紀事』第三(一九六七年)一三〇頁。

- (81) 川路聖謨著「長崎日記・下田日記」(一九六八年、平凡社)一八頁。

- (82) それらの句については、拙稿「日本の民主主義と部落問題研究の課題」(一九八五年十月、口頭発表。『部落問題研究』八七輯、一九八六年六月)で簡単にとりあげた。

〔付記〕 詳細な註記のなかには、一々、明記しなかったが、著書や解説・校註等に書かれた所在地や巻号数等に誤りを正した場合がある。註の表記の仕方が不揃いなのは、紙幅の関係から詳説を削除したためで、ご海容願いたい。